

SDGsを意識した幼児教育・保育について

—領域「環境」の視点から—

小 松 陽 子・松 下 由美子

1. はじめに

2020年という節目の年、日本は東京オリンピック・パラリンピック開催を予定し、それに向けて新しいサービスや技術の進歩・開発を迎え、希望ある生活になっていくのではないかと期待していた。しかし、実際は世界中に新型コロナウイルスという未知のウィルスが蔓延し、私たち人間の行動はかなり制限され、今まで当たり前と思っていた安全な生活が脅かされている。他にも、毎年のように想定外の自然災害などに見舞われ、今までの価値観や自然への向き合い方に大きな転換を迫られている。そんな中、SDGsといった言葉やサステナブルといった言葉をよく耳にする機会が増えた。書籍においても、環境分野ではもちろんのこと、経営や産業、教育といった幅広い分野でSDGsという用語がタイトルの一部に入れられていることが多くなっている。

このSDGsとは、Sustainable Development Goalsの略であり、「持続可能な開発目標」と訳される。これは、全人類が持続可能な未来を迎えるために採択された国際目標のことである。このSDGsの達成を目指すには、持続可能な未来をつくり出す子どもたちを育てることも必要であると考え。そして、その未来は単純なものではなく、今思い描く未来は「変容」と考え、より柔軟に強い意志をもって対応できることが重要ではないかと考える。2016年度には幼稚園教育要領が改訂され2018年度より導入

されているが、そこにもSDGsの概念は反映されている。

そこで、本論文では、未来を担う子どもたちにどういった力を身につけさせるべきなのかをまとめ、かつ保育者養成校としてどういった保育者を養成していくべきなのかを明らかにしていくことを目的とする。特に、領域「環境」に焦点をあて文献解釈により考察していく。

2. SDGsとは

SDGsとは2015年9月に国連サミットで150を超える加盟国首脳に参加のもと採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された持続可能な開発のための国際目標である。17の目標と169のターゲット（指標）から構成されている。SDGsは、読み方もエス・ディー・ジーズと語尾のsは目標（goal）の複数形を示し、1つだけの目標ではなく17の目標を2030年までに達成することが目指されている。表1に各目標と項目を示す。

SDGsは、2000年に採択されたMDGs（Millennium Development Goals：ミレニアム開発目標）を引き継ぐ形で提案されたものでもある。MDGsも、2015年までに達成すべきものとして8の目標と21のターゲットから構成されている。MDGsのいくつかの目標は期限よりも早い段階で達成され一定の効果があつたと評価されるが、達成できなかった目標や国際的な環境も大きく変化したことで新たな課題が見つかりSDGsへと引き継がれた。しかし、達成できなかった目標などが単に引き継がれたわけではない。MDGsは主に発展途上国に対して設定された目

令和2年11月30日受理

連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地

香川短期大学 子ども学科

TEL 0877(49)8052 FAX 0877(49)5252

Email komatsu.y@kjc.ac.jp

表1 SDGsの17目標

目標	項目
目標1（貧困）	あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる
目標2（飢餓）	飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する
目標3（保健）	あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
目標4（教育）	すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する
目標5（ジェンダー）	ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う
目標6（水・衛生）	すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する
目標7（エネルギー）	すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する
目標8（経済成長と雇用）	包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する
目標9（インフラ、産業化、イノベーション）	強靱（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る
目標10（不平等）	各国内及び各国間の不平等を是正する
目標11（持続可能な都市）	包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する
目標12（持続可能な生産と消費）	持続可能な生産消費形態を確保する
目標13（気候変動）	気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる*
目標14（海洋資源）	持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する
目標15（陸上資源）	陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する
目標16（平和）	持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する
目標17（実施手段）	持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

*国連気候変動枠組条約（UNFCCC）が、気候変動への世界的対応について交渉を行う基本的な国際的、政府間対話の場であると認識している。

出典：2015年9月25日第70回国連総会で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」
外務省仮訳より抜粋¹⁾

標であり、先進国主導で決められ途上国の意向を反映していないという問題点もあった。そのためSDGsは、「誰ひとり取り残さない」という共通理念のもと、「途上国だけでなく、先進国を含めたすべての国々を対象に、豊かさを追求しながら地球環境、人権を守ることに重きが置かれており、目標が8から17に増えたことで、包括的な目標設定」²⁾になっている。

このように、SDGsはあらゆる分野の視点から包括的に捉えなければならない目標である。こうした多岐にわたる目標を果たして達成できるのかどうか、冒頭で述べたように我々が現在直面している問題を考えると、達成しなければならない目標であると認識できる。もし達成できないと、最終的には世界が立ちいかなくなくなると考えられるからである。各目標に対し具体的なターゲットも挙げられているた

表2 SDG4のターゲット

SDG4.1	2030年までに、すべての子どもが男女の区別なく、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育及び中等教育を修了できるようにする。
SDG4.2	2030年までに、すべての子どもが男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達支援、ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする。
SDG4.3	2030年までに、すべての人々が男女の区別なく、手頃な価格で質の高い技術教育、職業教育及び大学を含む高等教育への平等なアクセスを得られるようにする。
SDG4.4	2030年までに、技術的・職業的スキルなど、雇用、働きがいのある人間らしい仕事及び起業に必要な技能を備えた若者と成人の割合を大幅に増加させる。
SDG4.5	2030年までに、教育におけるジェンダー格差を無くし、障害者、先住民及び脆弱な立場にある子どもなど、脆弱層があらゆるレベルの教育や職業訓練に平等にアクセスできるようにする。
SDG4.6	2030年までに、すべての若者及び大多数（男女ともに）の成人が、読み書き能力及び基本的計算能力を身に付けられるようにする。
SDG4.7	2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

4.a	子ども、障害及びジェンダーに配慮した教育施設を構築・改良し、すべての人々に安全で非暴力的、包摂的、効果的な学習環境を提供できるようにする。
4.b	2020年までに、開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国、ならびにアフリカ諸国を対象とした、職業訓練、情報通信技術（ICT）、技術・工学・科学プログラムなど、先進国及びその他の開発途上国における高等教育の奨学金の件数を全世界で大幅に増加させる。
4.c	2030年までに、開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国における教員養成のための国際協力などを通じて、資格を持つ教員の数的大幅に増加させる。

出典：2015年9月25日第70回国連総会で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」
外務省仮訳より抜粋³⁾

め、あらゆる分野において全世界の人々が、自分事として協力して取り組まなければならないものである。今の時点で、SDGsは全世界で未来に備え取り組んでいくべき国際目標であると認識できる。

3. SDGs達成に向けた教育

SDGsにおける、教育に関する目標としては4番目の目標（以下、SDG4と記す）が挙げられる。図1よりSDG4は「すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」³⁾であり、ターゲットとしては7つ挙げられている。表2に、SDG4のターゲットを示す。

SDG4の達成を目指す際、日本には二つの役割がある。一つは先進国として発展途上国の教育を支援

する役割と、もう一つは未来を担う子どもたちを教育するという役割である。その後者の役割に関して、幼稚園教育要領の前文において「これからの幼稚園には、（略）一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」⁴⁾と記載されている。子どもたちは、「持続可能な社会の創り手」として位置づけられ、改訂された幼稚園教育要領や学習指導要領にもそのことが記載されている。幼稚園教育要領には育みたい資質・能力として次の3つが挙げられている⁵⁾。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

こうした資質・能力は、次の段階である小学校学習指導要領や中学校学習指導要領にも育成したい資質・能力として記載されており、SDGs達成を目指す「持続可能な社会の創り手」の資質・能力として育成すべきものと考えられる。北村・佐藤・佐藤(2020)は、こうした資質・能力に関する考え方の根底には体系化された「知識」や「スキル」を身につけるだけでは十分ではないという問題意識があり、知識や技術を身につける過程での「学び方」を学ぶといったことが今後さらに必要になってくることを示唆している。加えて、SDGs自体に関しても、「国や地域のレベルで再解釈して、それぞれの社会に適合した目標として再設定するかということが重要である」⁶⁾としており、「新しい知識やスキルを吸収し続けるとともに、そうした新しい知識やスキルを自ら生み出し、それが社会の変化にもつながっていく。そのようなことを可能にする資質・能力を身につけるための学び」⁷⁾が必要と記している。今回の新型コロナウイルス感染症の影響で、いつ何が起き、事態が変化するかわからない状況である。SDGsの達成に向け様々な取り組みが進められていたが、経済への影響などを考えると進捗状況の後退あるいは新たな問題の発生も考えられる。そういった変化にも冷静に対応し活路を見出す諦めない気持ちや、新たな発想を生み出す人材の育成が望まれる。つまり、幼稚園教育においては、こうした学びにつながる基礎となる資質・能力の育成が求められ、(1)「知識及び技能の基礎」は、基礎的な知識の習得だけでなくその知識を習得する学びの過程も重要となり、それが(2)「思考力、判断力、表現力等の基礎」の習得にもつながると考えられる。そし

て、(3)「学びに向かう力、人間性等」は、身につけた知識や技術を駆使し多様な価値観や社会の変容に併せ、その時の最適解を導き出すことを支えるために、重要であると考えられる。

こうした力を育成するために、以前からESDを実践することの重要性が指摘されている。ESD(Education for Sustainable Development)とは「持続可能な開発のための教育」と訳される。北村・佐藤・佐藤(2020)は「ESDとは、自ら問題を発見し、それをどのように解決すべきかを、座学だけでなく参加・体験型の学びを通して考えていく教育のアプローチであり、まさにSDGs時代に求められている学びのあり方だといえる」⁸⁾と捉えている。ESDは、SDGsよりも早い段階から教育に取り入れられていた概念であり、ESDに基づいた実践研究も多くある。一方で、SDGs達成のために求められる学びのあり方ではあるが、ESDの概念が出された時の社会的状況も変化していることから、SDGsを意識したESDの捉え直しは必要であると考えられる。このことから、SDGsにつながる子どもの育成には、SDGsを意識したESDの実践が必要であると考えられる。

4. 領域「環境」とSDGs

今回の幼稚園教育要領の改訂において、領域「環境」では3「内容の取扱い」において次の項目の下線部が追記されている⁹⁾。

- (1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付く、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること。

この下線部は、資質・能力の(2)「思考力、判断力、表現力等の基礎」につながるものと考えられる。幼稚園教育要領解説においても、「幼稚園生活の中で、幼児は、自分とは違った考え方をする友達が試行錯誤している姿を見たり、その考えを聞いたり、友達と一緒に試したり工夫したりする。その中

で、幼児は友達の考えに刺激を受け、自分だけでは発想しなかったことに気付き、新しい考えを生み出す。このような体験を通して、幼児は考えることの楽しさや喜びに気付き、自ら考えようとする気持ちが育っていく。」¹⁰⁾とされている。他者の考えや気付きに触れ、その行動の意味を理解し、子ども自身の考えや理解が深まることが期待できる。

SDGsを幼児教育・保育に取り入れるには、SDGs自体があらゆる分野の課題を取り入れた国際目標であるという性質から、5領域の全てにつながり総合的に育成することが望まれる。一方で、SDGsは環境問題や開発問題に端を発しているため、領域「環境」の視点から研究されることが多い。特に、ESDの教材として「環境」が取り入れられている。実際に、加藤（2012）は、日本におけるESD 幼児教育・保育の実践事例を分類した結果、「環境」に関する活動が最も多く、次いで「社会／文化」「平等」そして「経済」と続いていることを明らかにした。幼児教育・保育への取り入れやすいことが「環境」活動が多い理由であろうと推察している¹¹⁾。

こうした教材研究も重要であるが、SDGsを意識した幼児教育・保育において、保育者の存在や働きかけも非常に重要になってくると考えられる。SDGsに必要な基礎となる資質・能力を育成するために「知識や技術」の伝達だけではない取り組みが必要である。教材を用意したり、子ども理解を深め子ども同士の理解をつないだりといった、環境を整える保育者の存在は非常に重要であると考ええる。その保育者のあるべき役割とはどういったものであるのか考察する。

5. 持続可能な社会の創り手を育成する保育者とは

田中・那須・藤原（2019）は、ESDのような持続可能な開発のための教育には「ファシリテーター」としての役割が教師に求められていると指摘している。ファシリテーターとは「教育の場では、学習者の声を引き出し、学習者同士の学びを促進する役割を担う。つまり、知識を伝達するのではなく、学習者に寄り添い、学習者と一緒に学んでいく姿勢が求められる」¹²⁾ 役割を担う。これまでも保育者のあるべき姿として、子ども理解を深め一人ひとりの子ども

に寄り添い、成長を促すことが求められてきた。つまり、持続可能な社会の創り手を育成する新たな役割が加わっても、これまでの目指す保育者像と大きく変わることなく対応できると考えられる。このことは幼児教育や保育の現場に限ったことではない。ESDという持続可能な開発のための教育は、最近になって新たに実践されるようになってきたわけではない。日本の教育現場では、子どもの主体性を重視し、明確な答えのない解を求める総合学習や道徳学習などがあり、その流れで、教師もファシリテーターの役割を兼ねる機会はあったと考えられる。しかし、「持続可能性」というSDGsの概念を意識するかしないかで、その取り組み方も変わってくる可能性がある。特に、SDGsウォッシュという概念がある。これは、SDGsに取り組んでいるようで別の視点から見るとSDGsとは逆の取り組みをしていたという場合や、うわべだけの取り組みのことを指す。そこで、教育者や保育者自身がSDGsを十分に理解し、あらゆる視点から問題を捉え取り組みを実践していることが重要ではないかと考える。特に、幼児教育では保育者は子どもたちにとって真似をしたくなるモデルとなる存在である。保育者自身が持続可能な社会の創り手となる必要があると考える。

現在、SDGsの認知度は徐々に上がっている。2017年から年2回のペースでSDGsの認知度調査が行われている。この調査において、「SDGsという言葉聞いたことがあるか」という問いに対し、「ある」と答えた人は前回より5.6ポイント増の32.9%に上ったことが明らかとなった。年代別では、「20代」が43.4%で最も高く、若い世代で関心が広がっていることがわかる。しかし、SDGsのことは知っていても、半数以上の人完全に理解しているとまではいっていない状況が明らかになった¹³⁾。このことから、保育者の間で、どの程度SDGsを理解し、幼稚園教育要領に反映されていることを知っているかどうか不明である。

6. まとめ

本論文では、未来を担う子どもたちにどういった力を身につけさせるべきなのかをまとめ、かつ保育

者養成校としてどういった保育者を養成していくべきなのかを明らかにしていくことを目的とした。子どもたちは「持続可能な社会の創り手」として、幼稚園教育要領で示された「知識及び技能の基礎」,「思考力, 判断力, 表現力等の基礎」,「学びに向かう力, 人間性等」といった資質・能力の育成が目指される。その過程で, 今後に変容する社会状況に対応できるよう「学び方」を身に着けておくことが重要であると考えられる。そして, それを支える保育者はファシリテーターとして役割を果たし, かつ保育者自身も「持続可能な社会の創り手」としてSDGsを理解し実践することが望まれる。今後の課題として, 実際に保育者がどの程度SDGsを理解しているか確認しつつ, 保育者養成校の教員として学生にもSDGsについて理解を促す取り組みをしていくことが必要であると考えられる。

引用文献

- 1) 外務省, 2015年9月25日, 「我々の世界を変革する: 持続可能な開発のための2030アジェンダ」, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf>, (2020年11月閲覧)
- 2) バウンド著, 功能聡子・佐藤寛監修, 2019, 「60分でわかる! SDGs超入門」, 技術評論社, p18
- 3) 1)と同じ
- 4) 文部科学省, 2017, 「幼稚園教育要領」フレーベル館
- 5) 4)と同じ
- 6) 北村友人・佐藤真久・佐藤学, 2019, 「SDGs時代の教育 すべての人に質の高い学びの機会を」, 学文社, p14
- 7) 6)と同じ, p18
- 8) 6)と同じ, p18
- 9) 文部科学省, 幼稚園教育要領 新旧対照表, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afielddfile/2011/03/30/1304415_002.pdf, (2020年11月閲覧)
- 10) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afielddfile/2011/03/30/1304415_003.pdf, (2020年11月閲覧)
- 11) 加藤望, 2016, 日本の乳幼児教育・保育における持続可能な開発のための教育(ESD)の現状と課題, 愛知淑徳大学論集—福祉貢献学部—, 第6号, pp.89-96
- 12) 田中治彦・那須正裕・藤原孝章, 2019, 「SDGsカリキュラムの創造 ESDから広がる持続可能な未来」, 学文社, p62
- 13) 朝日新聞社, 2030SDGsで変える 「SDGs認知度調査 第6回報告」, https://miraimedia.asahi.com/sdgs_survey06/, (2020年11月閲覧)

参考文献

- 1) 後藤由美, 2019, 「領域」環境から考える ESD・SDGs教材のあり方についての一考察, 瀬木学園紀要, 第15号, pp.54-58
- 2) 村上芽・渡辺珠子, 2019, SDGs入門, 日経文庫
- 3) 笹谷秀光, 2020, SDGs見るだけノート, 宝島社
- 4) 谷口一也, 2020, SDGs時代の幼稚園教育領域『環境』のあり方, 教育総合研究叢書, 13, pp.137-146